

横浜歌人会 会報 1 1 1 号



- | | |
|--------------|-----------------|
| 01 観月会報告／詠草 | 朝井恭子、杉下幹雄、清水八千代 |
| 04 短歌随感 | 伊藤宏見他 |
| 06 新入会員自己紹介 | 竹内芳恵、柴原明美、中村泰子 |
| 07 自選十首とコメント | 杉下幹雄、中村規子 |
| 09 評論 | 嗟峨直樹他 |
| 11 会員作品三首 | 本多豊明他 |
| 12 編集後記 | |

観月会報告／詠草

平成26年10月18日 東天紅ワシントン
ホテル24階店にて開催
詠草参加42名



月よりも人

朝井 恭子

今年の観月歌会は十月十八日、ワシントンホテルの二十四階「東天紅」で行われた。例年通りの会場であり、オーシャンビューの最良の部屋だ。当日は朝からの大快晴で会場の窓から見える海面が眩しい。月見にはもってこいの良い日、と思いきや十八日頃

は居待ち月であり月の出が遅いという。歌会中には見られないらしい。これも例年と同じだ。

月はなくとも歌会は人と歌である。今年の出詠舎は四十二名。千々和久幸氏、平野久美子会長の挨拶に引き続き歌会開始。歌会司会は小島熱子さん。歯切れの良い口調で会を進める。席順毎の批評と司会者指名の会員による批評が行われ、補足し疑問点が洗い出されて行く。こうした充実した批評を聴いていると、短歌は作者と読者の二人の感性が共鳴しあうことによって完成する詩であると強く感じさせられる。歌会が佳境に入る頃、窓辺に見える観覧車の色とりどりのライトが輝きを増す。全員の批評が済んだ後、質疑が行われ、活発で熱いやりとりがあった。私が一番心に残った歌は「夕暮れの陸橋わたる青年がひよいと三日月のせなに飛び乗る」(稲垣絏一)だ。シャガールの絵を思わせる浮遊感があり、三日月と青年の組み合わせが浪漫的な詩情を誘う。

・月の出ぬ観月会もまた良ければしあなたを月にして飲む

まさにこの歌の通り、月なき観月会後の懇親会は一層盛りあがった。月よりも人、そして又月よりも酒、である。

月の出ぬ観月会

杉下 幹雄

観月会は、十月十八日に桜木町ワシントンホテル

二十四階にて行われた。当日は誠に好天気であったが、筆者は秘かに懸念を抱きつつ会場へ向かった。

予定時刻午後二時、平野会長のご挨拶により開会。ここで筆者の懸念ははつきりした。月は翌日にならねば出ない。会長は朗らかに「早い時期に日時を決めて、月のことは忘れてた」と仰ったが、多分事実はそうではないのではないか。会場確保のご苦労を垣間見たような気がした。

歌会は、出詠四十二首、出席者三十六人。小島熱子さんの司会。各首につき第一評者一人二分。五つに分れたテーブルに各々第二評者が置かれ、佐波洋子、千々和久幸、中川佐和子、河北笑子、津金規雄各氏。忌憚の無い評が相次ぐ中を快調に進んで、三時半迄に一巡。お茶と休憩に入った。

三時四十五分よりフリートークキング。司会者のアグレッシブな問題提起も功を奏して、活発な発言が続いた。注目歌についての評、文語口語について、数詞・副詞・固有名詞の使い方等々が論じられた。

五時十分より懇親会。稲垣絃一さんの司会で和やかな進行となり、新会員が紹介され、新歌集の著者にも発言時間が与えられた。その間に窓外は急速に暗くなり、たちまちに文字通りの光の海と化した。月の存否は最早問題ではない。出詠歌「月の出ぬ観月会もまた良ければしあなたを月にして飲む」とおりの和氣藹々たる宴となった。七時十五分閉会。



観月歌会に参加して

清水 八千代

観月歌会に相応しい秋日和のよい一日、横浜歌人会による観月歌会が桜木町ワシントンホテル、東天紅に於いて開催されました。出詠四十二首、当日欠席者六名、小島熱子氏の司会により進行、一首につき御一人の意見発表が行われた。毎年この時期、観月歌会が行われているのだが、正直私は月の歌は難しく苦手である。何時もなかなか詠めなくて頭をかかえている。今年もお知らせを戴き今年は欠席をしよう、と決めていたところ、先輩からのお誘いがあり慌てて月、月、と空を見上げる始末。今年は一



baumoon、十五夜と美しい月を見ることが出来る。庭には秋明菊、水引草と材料が揃っている。その上私の二階の部屋は東南に窓があり遮る物がない、月の移りゆく様が良く見える。

花がなくても、月を見ることが出来なくても、かの名文、兼好法師の『徒然草』第三百三十七段の一節のように、花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。雨に対かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほ、あはれに情け深し。とある。

要は心の持ちようなのである。自分なりの歌を己に言い聞かせ一首を作る。

この度の出詠歌四十二首、所属結社の歌とは一味異なり、歌会の様子も大分雰囲気異なる。一首一首についての歌の掘り下げ方も深く、只々感心する。歌も個性的で、どう解釈したらよいか迷う歌もある、それはそれで発想の自由さを学ぶ。やはり出席して良かったと、心満たされ、秋のひと時、良い刺激を受けたことを感謝しつつ帰路についた。

平成二十六年 度 観月歌会詠草

誰がために咲くやこの花水引草ひっそりと咲く庭の片隅
石田幸子

お白粉花またの呼び名は宵化粧ま夏の闇に女た
野崎美智子

雨の夜のそこだけ見える電柱を水銀灯は薄く照らしぬ
後藤恵市

夕暮れの陸橋わたる青年がひよいと三日月のせなに飛び乗る
稲垣紘一

アカンサス尽れて立つる秋の夜グリーグのピアノしめやかに聴く
津波古勝子

月満ちて生れたる曾孫はしきよし高きうぶごえ亡夫も聞きしや
朝井恭子

昼の月水色淡くビル街に見つつ急ぎ行くアルテリ
伊藤美枝

新品のコインのやうなスーパームーン横浜球場上空に光る
河北笑子

マンションの東翼の上空に静かなりスーパームーン円くして静かなり
塩野崎宏

この月をスーパームーンと君言えりさやかなる月雲間より出づ
塚田キヌエ

日本海月の港の美保ヶ関鳥賊釣り船の沖に灯の寄る
井澤幸恵

この国に危うき闇の動きあり平和の月の光強かれ
田之口久司

とほくゐてひとを思へばはたすすき靡けるなへに月傾きぬ
杉下幹雄

「月がきれい」帰宅せし息の第一声 東南に冴ゆる十六夜の月
辰巳日出子

聴力も視力の低下も「年齢相応」と軽く一声で片付けらるる
田谷幸子

花も人も老いたる姿似てをりぬ色を薄めて百歳まで生きん
綿貫昭三

月の出ぬ観月会もまた良ければしあなたを月にして飲む
千々和久幸

雁が飛び月おおきくて薄穂の向こうに水辺のあるような色
高橋みずほ

月光に晒され雨戸を鎖しをれば身を抜けてゆく無音なるもの
小島熱子

とほき日の乳房想はず丘ありて翳りては射す陽に息づけり
津金規雄

方代忌供養の家つと玄水を手提げ帰る待つ人を
藤田絹子

翼鏡に月光をため眠りいる鴨なり湖の冷えまさりくる
平野久美子

一時を雨降らせたる黒雲のさつとすぐるや夕月明る
清水八千代

夕月と愛でて来しかどやがてには人住むところとなるやならむや
平尾眞

ほどほどの十万の夜景のうえ淋しがりの月とスッポン
内山汀子

しろじろと白鳥草の花々がうかびくるなり無月の夜に
山本登志枝

午後プイといでしがメール送り来て「海に大きな月が出てるよ」
渡辺礼比子

雪月花 千年讀へ来し国がまた戦争をしたがつてゐる
高尾文子

月のひかりは太陽の光夜さくら照らす月の出に会ふ
伊藤宏見

墓参終へ帰りくる道すつきりと心の晴れて足取り軽し(秋彼岸)
中村規子

引き揚げて本家の風呂におとうとと入りにゆきたる月の夜の道
柴原明美

若き日に住み居し里も変はり来て 面影偲ぶ我がみちのくを
下田聰子

・知らぬ間にいのち吸はれてゆくやうな それでも直ぐに月を見てゐる 田代弥生

・昼間見し花のなけれど芙蓉の葉 月の光を味方に遊ぶ 中川佐和子

・空の藍わけても深し月読はみづから照らし渡りゆくかも 時本和子

・三陸の被災地に照る秋の月を観たしと思へど折あしく朔 土屋美代子

・一面に蚊帳吊草がしげる庭落ちたる月の眠りておらん 佐波洋子

・背のびしても海は見えない桜木町親不孝通りの万年ぞうり 渋谷香代子

・戸に出れば薄月夜して待つ人の来るがごとくに充ちくるものあり 新田由美子 懇×

・真白なる月のしづくはわが身体非性ならしむ 光りてゆかむ 中川宏子

・輪郭はおぼろになりてゆくばかり雲間の月もあの面影も 真鍋正男

・破れ蓮が言葉かけくる池廻る人と別れを惜しむし 永平緑



短歌随感

森岡貞香の一首

伊藤 宏見

私は今、月刊誌「沙羅」に連載して『森岡貞香を解体する』という文章を綴っている。そしてその終りの方になって、

・人アツマリケレド、サルタシカナル事モナシとぞ法然臨終の記(過ぎてゆく)

について考えを述べようとしている所である。

それにしても、この貞香の歌について出会ったことのある人は、どう思われたかである。

彼女の歌は「女人短歌」から始まると大筋に思われているようだが、戦後の歌壇の前衛的な存在でもあったとも目される彼女の歌が、突如、かかる詠風に魂を入れて驚天する人もいるのではないだろうか。それでなくとも、貞香の歌は、人の命即ち、無常にかかわるものが多い。

・人墜ちし跡を辿りて走り出しといふ正方形の窓枠がある

などというむつかしい視点の歌や他に鬼面人を驚かす風の詠み方をする作柄が感じられるが、この一首は家屋の「掃きだし」という窓の構造が判りさえすれば難解な一首とはいえるものではない。きわめ

て常識的なものに落ち着くのである。

さて、原文引用の歌「人アツマリケレド」の一首については、中世の高僧伝や仮名法話類、説話集や方丈記などには、片仮名書きが多く、却ってその方が、孤寂な風趣の筆跡を感じるものである。貞香は身体に故障が多く、他人の死や己の生命に普段から感心が強く、切実なものを感じさせて来たが、法然の臨終に衆聖の来迎も無く、弥陀の乗る紫雲も無かったことに却って感動を来したのである。

短歌と私

中込カヨ子

初めて入院した時にベッドから眺めた、白い雲がゆつたりと流れる、紺碧の空の美しさを伝えたいと思ったのが、短歌を詠むきっかけでした。それは、健康でいられる、当たり前前の事の素晴らしさを実感したからでもあります。

そんなとき、地域の広報誌で吉田宗一郎先生の「未知の会」を知り、続いて花實短歌会に入会しました。

吉田先生からは「黄水会」「横浜歌人会」の創立に携わっておられました時、皆様が熱心に努力されたお話を折りに触れ伺いました。横浜歌人会創立からの会員や役員の皆様のご努力があって、四十五年の歴史が繋がっているのだと思います。

入会して、色々な結社の方々と一緒にする中で、短歌に対する様々な理念や表現の方法がある事を知

り、それぞれの結社の理念の大切さが分かりました。四年前に大腿骨を骨折し、咄嗟の行動が出来ないこと、集団での歩行が難しいこと等で、横浜歌人会への出席が出来ていませんが、街に出る時は、杖をつき、ゆつくりと歩いています。

次の歌は、お見舞いに頂いた歌集から、心に響いた当時九十六歳、長沢美津さんの歌です。

・手を休め心を休めひとときを無心になりてまた立ち上がる

・年ふりていくつになりても自らの楽しみ心捨ててはならず

拙い短歌ばかり創っていますが、皆様のご助言を頂き、一生懸命努力して、これからも短歌と手を繋いで、楽しみながら歩いて行きたいと思っています。

水際の時間

池谷しげみ

秋の一日、散歩の足をすこし伸ばして南へむかってみた。金沢区長浜のしずかな公園の一角には、野口英世記念館がある。明治二十二年、二十二歳の野口が、わずか五か月ではあったが、検疫所の細菌検査医官補として勤務した。当時は世界的にペストやコレラが流行し、横浜港へ入港した「亜米利加丸」の船中で高熱をだした二人の船員からペスト菌を発見。黒死病と恐れられていたペストの日本上陸を水

際で防ぐという大金星をあげたのが、野口だった。

この実績を、師である北里柴三郎に買われ、推薦を受けて清国へ渡り、そののち渡米のチャンスをつかんだことから、野口が科学者人生のスタートをきった場所ともいえるだろう。

ひとへの感染をおそれ建てられたため周囲に人家はなく、木立ちにかこまれたその建物は、わずか四つの部屋に仕切られた、小ぶりで質素なつくりだ。むかしのままのたたずまいを残す細菌検査室には当時つかわれた顕微鏡や消毒装置、培養のための孵卵器などがいまも展示されている。

隣接する事務所棟は当時の建物の外観を復元して現在も記念館維持の事務所として使われ、二階の集会室はだれもが使える仕様になっている。昭和四年五月、与謝野鉄幹、晶子夫妻が仲間十人あまりとともにこの集会室を訪れ、歌会をしたとの記録がある。個々の歌が残されておらず残念だが、思いがけない取り合わせに驚いた。穏やかな海をながめながらの歌会と、いのちを守るための必至の検疫作業。水際にながれた時間をあらためて思う一日だった。

写生について

松本嘉猷

短歌に於ける写生について斎藤茂吉は「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」と定義している。ここに於いて、「観入」とは主客対等であり、自然・

自己一元の境地が主客均衡の観入である。

茂吉の写生の規範にそっているか否かは甚だころもとないが、平成二十六年上半期の私の詠草より十首選んでみることにする。

・八景ビルの屋上に待ちたる初日の出深紅の真円に
こころ鎮まる

・起き出でていぶせき朝聴きにける「トロイメライ」
に心はれたり

・庭に来て千両の紅きこぼれ実を孜孜として拾ふ年
賀の鳩は

・玄関に活けたる百合の盛り花ゆ萎えしを除くシニ
アホスピタル

・「トロイメライ」聴けばおもほゆ祖母われを育みく
れし幼き日々を

・妻と吾身の衰へをかたみにぞ嘆き生きある今の
幸福しあはせ

・亡き息子こより譲り受けたる広辞苑表紙はがれてつ
くろひにけり

・百老歳の媪の便りに「老いて寂しう御座います」
としたためてあり

・雨晴れて天と咲くはなみづき五月の風に花揺れ
止まず

・つじの木に礼肥遣らんと土掘れば跳ぬる蚯蚓の
親子に出逢ふ

イマジネーション

大沢優子

大き鷹井戸出でしときイエーツよ鷹の羽は古き井
戸を蔽ひしや 葛原妙子『鷹の井戸』

アイルランドの詩人イエーツの『鷹の井戸』を知

つていれば、葛原妙子の作品のなかで比較的わかり
やすい歌かもしれない。イエーツは日本の能に影響
を受け、ケルトの叙事詩と融合した舞踊劇『鷹の井
戸』を創作した。すでに英国で演じていた伊藤道郎
による帰国公演の記憶をもとに、葛原が歌に詠み、
歌集タイトルにも採用したいきさつは後書きに詳し
く、知る人も多い。片山廣子による翻訳もある。

だがイエーツの他の舞踊劇は『鷹の井戸』ほど有
名ではない。しばらく前、そのひとつ『骨の夢』を
翻案した現代能を見る機会があった。原作はイング
ランドからの独立運動がテーマだが、ここでは舞台
を琉球と島津藩に、シテを能楽師、ツレをオペラ歌
手が演じ、音楽は尺八と琴を採用するという思い切
り斬新な演出であった。当夜のゲスト、アイルラン
ド大使は時代、舞台、ジャンルを超えた作品を繋ぐ
ものは「イマジネーション」であるとスピーチした。

詩、短歌、俳句のジャンルを越えたコラボレーシ
ョンは雑誌の企画に時折みられ、朗読会を楽しむ機

会もある。それだけではなく展覧会、音楽、映画も
しばしば作歌へのヒントになる。だが原作をなぞり
直すことから抜けるのは難しい。永遠の命を得る水
の湧くという井戸、それを守る鷹の翼、夢幻とも思
える世界へ葛原妙子は問いをなげかける。その時、
私にもその古き井戸が見える気がした。

坪野哲久記念館の記憶

小島熱子

澄んだ秋天を見ていると石川県の能登にできた坪
野哲久文学記念館を訪ねた日のことが思い出される。
あの日は北陸には珍しい秋晴れであった。二〇〇六
年の夏に開館されたばかりの記念館は二十坪弱の平
屋のこじんまりしたもので、来館者は私のみであっ
た。

初版本の歌集、額装や雲版におさめた哲久の歌の
自筆の色紙（その筆遣いはたつぷりとして以外に穢
のない温かいものだった）、その他に原稿、焦茶色
のびろうどの鼻緒の桐の下駄、カシミヤのマフラー
などが展示されていた。そのうち葉書大のメモ用紙
のようなものが目に入った。それは哲久の病床での
筆記で、「何といっても作品あつてのこと、イ雅致、
口風格、ハ民衆愛」と書かれてあつた。民衆愛はプ
ロレタリア歌人であつた哲久の面目が覗いていたが、
何といっても歌人というもの、短歌作品というもの
の本質を突くと同時に、現状への叱声のように思え

る言葉は強く私を打った。それは今も私の中に羅針
盤のように忘れずにある。

金沢育ちの私と能登を故郷とする哲久とは日本海
を見て育った点では同郷である。それゆえに哲久の
世界は身に沁みてくる。

秋の木洩れ日の中にひっそりとあつた羽咋志賀
町のあの記念館をいつかまた訪ねたいと思つて
いる。

・昏れふけてこな雪しまき西方に群落なせる星み
だれたり 『百花』

・かなしみのきわまるときしさまさまに物象顕ちて
寒の虹ある 『碧巖』

・蟹の肉せせり啖へばあこがるる生まれし能登の冬
潮の底 『北の人』

新入会員自己紹介

竹内芳恵

このたび横浜に歌人会のあることを教えて頂き、
そして横浜の住民として皆様のお仲間に加えて頂け
ることを嬉しく思います。

私の短歌との出会いは学生時代にさかのぼりM教授から北原白秋の「桐の花」、与謝野晶子の「みだれ髪」、若山牧水の「海の声」などについて情熱的な講義を受け、強く心惹かれた事を記憶しています。

しかし、作歌を始めたのは、大変遅く退職して舅姑の看取り、息子の自立を迎えて六十歳に近い頃の出發でした。

熊本に安永藤子先生の短歌教室のあることを知り入会しました。ここでは、写実の大切さ、自然を詠むことの意味について学びました。

今、「日本歌人」の新入会員として、前川佐重郎先生のもとで、前川佐美雄の流れに足を踏み入れたばかりで、初心にかえって短歌を楽しんでいます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

柴原明美

この度、佐波洋子先生に、紹介して頂き入会させて頂きました、柴原明美と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめて参加いたしました、横浜歌人会観月会は何も分からないので、おろおろしていましたら、みなさまの和やかな雰囲気のもとに導かれ、有意義で時の過ぎゆくのも忘れる程、愉しませて頂きました。ありがとうございました。

一九九九年、夫の十三回忌まじかい秋、二人の娘が住む横浜の地へ山口県下関市から、越してまいり

ました。翌年の春、あこがれの森岡貞香先生の「石畳の会」に入会し、お亡くなりになるその月までご指導を頂き、貴重な九年間を過ごしました。

その後お仲間と「夏至の会」に参加しております一方、わずか二年間ではありましたが「かりん」に学ばせて頂きました。

しかしその頃体調を崩し「かりん」は退会いたしました。この後、佐波洋子先生の教室に参加させて頂き、この後、歌集を目指そうと思いはじめ、二人の娘からも励まされ、佐波先生のご指導のもとに纏めました。二年前夫の任地だった、ニュージランドを訪れた際の歌より「光る石」として十三年間の作品中、三五五首を収めたものです。

横浜に住んで以来、よき歌の師、歌友に出会えたことは幸せで、私なりに続けてまいりたいと思えます。どうぞ今後ともよろしくご指導くださいますようお願いいたします。

中村泰子

「潮音」に所属しております中村泰子と申します。稲垣紘一さんのご紹介で、横浜歌人会の一員に加えていただくこととなりました。どうぞ宜しくお願いいたします。

私は東京の京浜工業地帯大森に生まれ育ちました。結婚を機に横浜の住人となり四十年程がたちます。初めに住んだのは社宅のありました金沢文庫で

した。その後南区の弘明寺に移り住み今は我が家のベランダからみなとみらいを見渡すことが出来ます。子の通っていた小学校の校歌に「丘に登れば遥がえる、いつかそこまで行こうと思う・・・」との一節があります。私もそのような短歌の道を歩んで行けたらと思っています。体育会系の学校を出た私にとって短歌は全くの未知の世界でした。主人が長い間単身赴任をしていたこともあり五十歳になった頃最後の趣味に何か始めたいなと思いました。

妹の住んでいたマンションの集会所で開かれていた歌会を気軽に覗いたことが短歌への始まりでした。その奥深さ、難しさに後悔すら覚えておりますが先輩方の励ましに支えられて今日まで続けてくることが出来ました。

これからは楽しみながら歌を作っていきたいと思っております。



自選十首とコメント

『偲歌(さとびのうた)』(平成26年9月・

本阿弥書店)

杉下幹雄

旭区から泉区に引越した。年齢相応に生活を簡素

化する為である。分譲地を通り抜けて台地の端に出た所に建つ低層集合住宅である。そこから先は和泉川が削った低地で、元來人の住んできた村里である。街と里の境界線上に住んでいるわけである。

日常は自室の窓から里を眺め、丹沢の山々を眺め、何かしらの読み、思い、考えて暮らしている。時に散歩に出る。足は自ずと里へ向かう。里の方が問題を多く抱えているが、面白味もまた豊かなのである。そんな中で溜つた歌を一冊に整理した。会報に掲載してもよいとの事なので、お願いすることにした。

・菜の花のまばらに咲きて捨て畑去年くね耘りし人の
ゆくへや

・椿の枝身をささふるにたりたるや芭蕉の杖は細く
まがれり

・陰もなき一直線の道を行くこの真昼間の夏の簡明
とほるなり

・想ふことなにとてなけれ静けさにただ耐へてをり
秋の夜長を

・きのふ見し石ころけふも見て通るすこし場所が
変わったらうか

・妻めをもちて畑つくりて逝きにけりこの朝背戸に蟬
声暑し

・たちまちに白雨来たりて鐘楼に子供詰め込みすな
はち去りぬ

・三尺の二尺は濃みどり一尺は白輝るねぎの太きを
買へり

・春近しトラクター駆る男あて土ひと色に畑を均す

『いととき馬ニコラス』(平成26年1月発行・

文芸社)

中村規子

・悪く言はるる馬を庇ひてわれは言ふ過去の性格過
去の成績

・心病む馬見て来たり悲しみの湧ける泉を心に抱く
素直さは愛にて育てらるるもの甦らせむわれの愛
にて

・青草を食べつつ馬のわれ見詰む 乳を飲みある乳
児のごとく

・病める心に寝むる言葉を浴びせたり馬に施すわが
治療薬

・もう一度信じてみるよ人間を優しくなれる馬の目
語る

・竹の葉を与ふるわが手そつと銜へそして離せり「あ
りがたう」ならむ

・支へつつ支へられつつ生きて来つ苦しき時の最良
の友

・健気けなげなりき君の優しきまなざしは傷める心つねに
癒せり

・ニコラスの遺体宮崎大学に引き取られこれより学
生の教材となる

はじめてニコラスに逢つた時、ニコラスは若いお

嬢さんの自馬であった。数ヶ月後、彼女の都合で他の乗馬クラブに売られた。慕っていた人を失った馬は、私が再会した時には、人間が信じられなくなつたのか、かなり荒れていた。処分寸前であった。私の耳に入ってくるのは、ニコラスの悪口ばかりであった。たまらなく可哀想になった。ニコラスは、乗馬に開眼させてくれた馬であった。私が見てあげようと思ひ、その時通っていた乗馬クラブをやめ、ニコラスのいるサンヨーホースガーデンに移つた。そして青草、竹の葉、りんご、人参など馬の好きなものを持って行つてあげた。馬衣やバンテージも買ってあげた。馬は人の言葉も分かるので褒めてあげた。

ニコラスは私の気持ちがあつて、もう一度人を信じてみようと思ふようになり、落ち着いておとなしくなつた。いつか看板馬と言われるようになり、「ニコちゃん大好き」と言われるようになった。馬場馬術認定試験では、受験する人を皆、良い成績で合格させた。しかし、二十七歳になり蓄膿症にかかり、

悪化し、乗馬クラブでは、不要となった。しかしこのまま肉にするわけにはいかなかった。それで気持ちの同じ友と二人で引き取り、鹿児島県にある養老牧場に移した。すでに病気が重く、二ヶ月と一週間で鼻呼吸ができなくなり天国へ旅立った。墓を作り納骨した。毎年墓参りに行く。私の行く日は、必ず晴れる。今は天国から見守ってくれていると思う。著臚で骨がとけて出来た大きな穴二つを持つニコラスの頭蓋骨は、今宮崎大学で標本となり役だっている。



「世代間の断絶」とは何か

嵯峨直樹

1、「短歌の虚構問題」

最近の話題といえば、「短歌の虚構問題」だろう。昨年の短歌研究新人賞は、父親の死を題材にした石井僚一が受賞した。

- ・父危篤の報受けし宵缶ビール一本分の速度違反をふれてみても、つめたたく、つめたたい、だけ、ただ、ただ、父の、死、これ、が、これ、が、が、が、が、
- ・火葬炉の鉤は硬し性交の後に生まるる我等を思う
- ・ネクタイは締めるものではなく解くものだといい

し父の横顔

「父親のような雨に打たれて」短歌研究 2014.9
ところが、作者がこの父は実は存命であり死んだのは祖父だったと地方新聞に打ち明けた事から騒動ははじまる。

最も熱心にこの一連を推した加藤治郎は、その責任感から新人賞発表の次の号に「虚構の議論へ」という一文を寄せている。

私は、選考委員の一人であり当事者である。「短歌研究」の読者への説明責任があると考ええる。

「虚構の議論へ」短歌研究 2014.10

自身の責任を明確にした一文で、率直に評価すべきだろう。新人というのは、短歌の世界でもっとも弱い存在である。新人賞の受賞作が出る度に、その瑕疵を批判する人は多いが、選考委員を批判する人はどういうわけか少ない。新人の作品は、もとより選考委員によって選ばなければ俎上にも載らないのだ。弱い新人を下手法下手法だといって（当たり前だ。新人なのだから）、おしまい、という事で済まされる問題ではないのは明らかだろう。

受賞者の歌論が展開され、虚構の議論が復活するかも知れない。すべて可能性である。

「虚構の議論へ」短歌研究 2014.10

加藤は、この一文をこう結んでいる。受賞者の歌論ははまだ展開されていないが、「虚構の議論へ」という加藤の狙いどおり「短歌の虚構問題」について

世代を問わず活発な議論が出てきている。二十代、三十代の口語短歌と中高年齢との断絶が言われて久しいが、この「短歌の虚構問題」は世代間を繋ぐ触媒として機能しはじめているようである。

2、世代間の断絶とは何か

角川の短歌年鑑（平成27年版）では、「短歌は世代を超えられるか」という座談会を行っていて面白く読んだ。参加者らが、「近代〜現代短歌の流れを汲む歌」と思うものと、「これまでの流れとは切れていると感じる歌」を持ち寄って議論している。二十代、三十代の「これまでの流れとは切れていると感じる歌」をどう扱うかを考えさせられる好企画である。

こういった世代による価値観の違いをどう超えるのか。そのヒントになるのが短歌研究11月号の「作品季評」である。

森本平が、若手に人気の吉岡太朗の歌集『ひだりききの機械』を小池光といっしょになってこき下ろしている。あまりにひどい言い方なので若手からの反応は最悪だが、こういった率直さだけが異なる価値観の者同士のコミュニケーションの端緒ではないだろうか。

若手と関わるのが面倒くさいが為の黙殺、若手の歌が分からないのは恥ずかしいので分かったフリ、若手の歌が苦手なゆえの無関心の装い。これらが世代間の分裂を強化させてきたと思うのである。

3、二つの共同体

学生短歌会を中心として、インターネットを中心
に交流を深める若手歌人。団塊より上の世代を頂
点とし、団塊の世代を中心とする歌壇の共同体。こ
の2つの共同体が分断しているのがここ最近の最も深
刻な問題だろうと思う。

インターネットや大学のサークルからは、若者が
口語短歌を短歌だと思つて流入してくる。他方で、
主に新聞歌壇やカルチャーセンターを経由して高齡
層が万葉集などの和歌を短歌だと思つて流入してく
る。短歌の高齡化が長く叫ばれているがそれは違つ
て。若い頃から短歌をやっていた人が老いるのではな
く若い頃関心がなかった人が高齡になって相次いで流
入してくるので、歌壇は常に高齡層が厚い。

私の印象では、この二つの共同体はどちらもかな
り内向きである。お互い関わらない分には、どちら
もそれなりに楽しくやっている。しかし、もうお互
い無視をできる間柄でもないだろう。両者を繋ぐ事
ができるのはただただ率直さであろうと思うのだ。

堂園昌彦歌集『やがて秋茄子へと到る』

について

後藤恵市

標記歌集は若手の短歌作者の間でかなり評判に
なっている。また総合誌にも多く取りあげられてい

るので、ご存じの方も多いただろう。12月13日に東
京の中野サンプラザで同歌集の批評会（参加者10
0名）が開催され、石川美南、内山晶太、大森静香、
斉藤斎藤、染野太朗、田村元、永井祐、服部真理子、
山崎聡子など多くの若手歌人が参加した。

この歌集については「従来の短歌と同じコードで
は読めない」といった批評もあるが、季節感に溢れ
た作品が多く叙情的でかつ繊細である。その点では
案外近代短歌と接続しているものもあるような気が
する。

・ 太陽が冬のプールに注ぐとき座つて待つていたこ
んな薔薇

・ 秋茄子を両手に乗せて光らせてどうして死ぬんだ
ろう僕たちは

・ 僕もあなたもそこにはいない海沿いの町にやわら
かな雪が降る

・ 夕暮れが日暮れに変わる一瞬のあなたの薔薇色の
あばら骨

声調はどれもなめらかで作者固有の美意識によつ
て構築された作品である。一首目と二首目は、上句
と下句の関係が意味的には希薄であり、また短歌的
喩として機能しているとも思えない。しかし、この
世で偶然出会った事象・想念には必ずしも意味的な
連接があるとは限らない。作者は対象物を素材にし
て意味のある文ではなく、短歌という芸術作品を構

築しているのではないだろうか。また、三首目はか
なりの人が、僕もあなたも死んだ後の世界を詠んだ
歌と解している。吉川宏志も「この人の歌は、自分
が死んだ後の世界から現在を見ているというまなさ
しで歌われている気がする」（『短歌研究2014年2
月号』）と述べ、この歌を例にあげている。四首目の
歌は下句を暗喩表現と考えるとかなり難解であるが、
何かを比喩として表現したというよりは、視覚残像
を感覚表現したものと考えられるのではないか。

この歌集では僕、僕たち、あなた、君が多用され
ているが、どれも生活感に乏しく実在性が感じられ
ない。短歌作品を構築するために登場させているよ
うな気がする。また、一般に短歌は作中主体として
の我（虚構の我でも構わない）の視線から世界を把
握するのだが、この視線の曖昧な作品が多くある。

・ 美しさのことを言えつて冬の日の輝く針を差し出
している

・ 君もあなたもみな草を見て秋を見て胸に運動場を
宿した

・ 青空を見下ろしたくてその昔君が道路に置いた手
鏡

・ ほほえんだあなたの中でたくさんの少女が二段べ
ッドに眠る

一首目はこの歌集の巻頭歌であるが、「冬の日の
輝く針」は〈我〉が差し出しているのか、〈我〉に向

かつて差し出されているのか、別の誰かが独り言を
言いながら差し出しているのを〈我〉が見ているの
か、曖昧である。しかし言葉によって〈詩〉を構築
しているのだ、と考えるとそんな意味の解釈はどう
でもよいのだろう。残りの三首も〈我〉はかなり希
薄である。

この歌集は、斎藤茂吉以来の〈我の塊〉の短歌―
我が何を見て、我が何を感じ、我がどう行動した、
という構造の短歌のコードでは読みにくいかも知れ
ない。言葉が先行し、言葉の優位性を全面に出した
初期白秋の詩歌を補助線にすべきではないだろうか。
作者自身も北原白秋を影響を受けた歌人と言ってい
る。他に三首引いておく。

・炎天に悲しい胸が光るまで僕はあなたと広場に立
り

・いつか詩がすべて消えても冬鳥のあなたに挨拶を残し
たい

・シロツメクサの花輪を解いた指先でいつかあなたの臉
を閉ざす



会員作品三首

本多 豊明

- ・車窓より木枯らし渡る芒原見つつ過ぎたり多摩の鉄橋
- ・寒々と暮れゆく町の淋しさよ大根一本買って帰るか
- ・一本のこの道を行け白寿まで句を詠み歌詠み新聞読みて

葉山 昌子

- ・冬枯れて地に伏す小菊失なひしものさまざまわれに語りて
- ・思ひのほか八十代はよきものとふわれにもほのかな灯をともし
- ・青信号続く道路をかけぬけて今日はいいことあるかもしれぬ

小野 政男

- ・とにもかく生きているなり八十八歳ヨタヨタヨタ今日もシヨツピング
- ・「無頼派」なんて懐なつかしき語よ無頼派にととうなれず八十八のいま
- ・野毛の今日子供ら溢れ沸きたてり梯子のピエロが宙返りする

渡辺 礼比子

- ・秋ゆうべ痛む足腰 遠祖はも忠義者にて人斬りしとか
- ・新しきピアノの匂える秋なりき気付かれもせで果てし恋はや
- ・ちいさなる秘密はあらん冬晴れの川面に映るさかさまの家

新田 由美子

- ・観月会に集いし人らの詠む歌に月はそのたびのびちぢみする
- ・友のぐち聴きつつ食す昼膳に少し足りないだしの旨みが
- ・塩豆を思わず終南天の白き実ふみしめ師走の街ゆく

柴田 昌子

- ・一村が逆光となる湖べりの蓮田にたたずむ白き水鳥
- ・〈小雨〉というバス停ありて小雨降る集落にあう人ら穏しき色あせし鳥瓜さがる過疎の村再び訪ることのなからん

石田幸子

- ・ヘリコプター飛ぶ音聞こえ気づきたり今日は国際女子マラソンと
- ・第6回横浜国際女子マラソン杖つき見物若き走り
- ・東海道新幹線開業50年とぞ用を作りて乗りし若き日

小寺敦子

- ・横山隆一邸宅跡はスターバックスさま変りして時の移ろう
- ・店内に展示されたる「フクちゃん」の原画におもう「鎌倉文庫」
- ・隆一の過こせし庭はそのままにプールに低く秋あかね飛ぶ

荒川とよ子

- ・朝な夕丹精こめし菊ならむ赤黄の膾あは嫂あなのもてなし
- ・魯田ひつちだの靡く白穂の明るみてレモンのやうな十日夜とをかよの月
- ・道の辺に伏して咲きある白菊の紫色付く霜日和はも

中川佐和子

- ・幸せの詰まったような空気が吐く冬の観覧車地上に降りて
- ・まんなかにクロック置きて六十のアームをまわす大観覧車
- ・世の中に腐らぬ木ありて甲板のイペに触れたり大棧橋に

編集後記

・本年の観月会は平成26年10月18日に東天紅ワシントンホテル24階店にて開催されました。詠草参加は42名でした。

・会報の構成にご意見・ご希望がございましたら是非とも左記平野あてご連絡ください。

・会員の皆様で、歌集を上梓された方は、自選10首と説明文(23字×28行)を左記後藤あてお送りください。会報に掲載させて頂きます。

・振替口座(郵便局)は左記の通りです。
00230-0-52137 名義 横浜歌人会

・横浜歌人会では現在、年に一度、会員名簿を更新し皆様に配付しておりますが、名簿への住所・電話番号の記載を希望しない方がおられましたら、ご面倒でも左記平野あてご連絡くださいますようお願い致します。

・なお、会員名簿は会員の住所・氏名・電話番号の記載された個人情報集合物です。各自の責任において管理・保管してください。

発行日 平成二十七年一月二十日

発行人 横浜歌人会 代表 平野久美子

〒245-0066 戸塚区俣野町

1403-11-206

編集人

後藤恵市

〒236-0046 金沢区釜利谷西1-46-6

Tel・Fax 782-8778

address kg4238@n.jcnet.jp